

就活スタートアップのためのブレンディッド方式自己探求システムの開発と実践

Development and Evaluation of a Support system using network for Startup of Job getting

江利川良枝*, 高木直人*, 上田幸則*, 鴨谷真知子**, 松永公廣*
Yosie ERIKAWA, Naohito TAKAGI, Yukinori UEDA,
Machiko KAMOTANI, Kimihiro MATSUNAGA

(* 名古屋学院大学) (** 東大阪大学短期大学部)
Nagoyagakuin University, Higashiosaka Junior College

1. はじめに

大学は、就職活動支援（就活）のために初年時からのキャリア授業、3年時の就職ガイダンスやセミナーを実施している。また教職員やキャリアカウンセラーによる個別対応なども用意されている。しかし多様化する学生を急激に変化する社会状況に自主的に対処させることは容易ではない。

本研究の目的は、学生の進路選択に応えるために、SNS(Social Networking Service)を利用した就活スタートアップ自己探求支援システムの開発とその評価である。発展的には実践によって教員やカウンセラーの負担を軽減できる運用方法を確立することである。

2. キャリアセンターと就活

大学は、図1のように関連部署と連携してさまざまな行事（学生就活支援、教職員共同の学生就活支援、会社説明会開催、個別企業説明会開催、企業連携推進、各種団体主催の情報交流会参加、J-NET（大学専用ネット）の求人情報管理、就職情報管理、各種就活講座の計画・実施、インターンシップの計画・実施、キャリア関連科目の支援、資格センター業務、求人依頼など）を

企画・実行している。

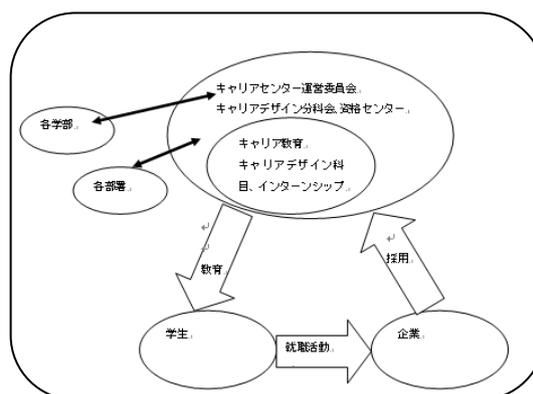


図1 大学のキャリア支援図

2. 自己探求支援システムの狙い

非ブランド大学では大学の成績が良い学生ほど、またクラブ・サークル活動に熱心に取り組んだ学生ほど内定を獲得し易いことが知られている^[1]。また非ブランド大学上位ではインターンシップ、下位ではアルバイトに熱心に取り組んだ者ほど内定を獲得し易いという傾向も示されている^{注1)}。

すなわち学修、課外活動、その他の活動に積極的に取り組んだことを履歴書やエントリーシートに印象強く書けること、そして早期に就活をスタートできる準備を整え

ることが内定につながると考えられる。

しかしながら学生がエントリーシートや履歴書を書こうとすると、自分の学修生活の何をどのようにどこまで書いていいかわからなくて苦勞しているようである。それが就活スタートを遅らせている要因の1つと考えられる。

そこで早い時期に就活をスタートするには、学修活動、課外活動などに取り組んだことを、エントリーシートや履歴書に印象強く書くことができ、面接でも落ち着いて応答できるように自己整理させることが有効と考えられる。

そのために大学は、ネタだし講座（就職活動知識）やレベルアップ講座などを実施しているが、希望による参加となるため準備不足のまま就活動をスタートする学生がいるのが現実である。さらに早期に始めても最終面接の結果に一喜一憂し気持ちの張りを失って時間を浪費することもある。また大学側に指導記録が残されていても、学生が利用できるようになっておらず経験を積みあげられない場合もある。

そこで教員と学生が共有できる SNS を活用して、就活スタートアップのための自己探求支援システム（以後はシステムと呼ぶ）を開発・評価した。その目的は、学修の振り返りを教員と学生が共有することで、たとえ就活に時間を取られるようになっても、学修に取り組んだ記録を振り返り履歴書やエントリーシートに書けるようにすることである。すなわち開発した SNS の特徴は、教室での面接指導とネットでのコメントを併用したブレンディッド方式といえる。

学生の記述と教員のコメントがすべてネットに記録されており、教員はそれらを見て学生の直面する場面に合わせて具体的に支援ができる。また学生はその記録を辿って履歴書やエントリーシートの作成に役立てることができる。

今後運用経験を整理してキャリア授業や学科の進路指導授業などに活用したいと考えている。

図2は、システムの想定であり就職活動スタートアップ時の自己分析、業界・企業研究、応募書類（エントリーシート）の作成を含むが拡張可能である。

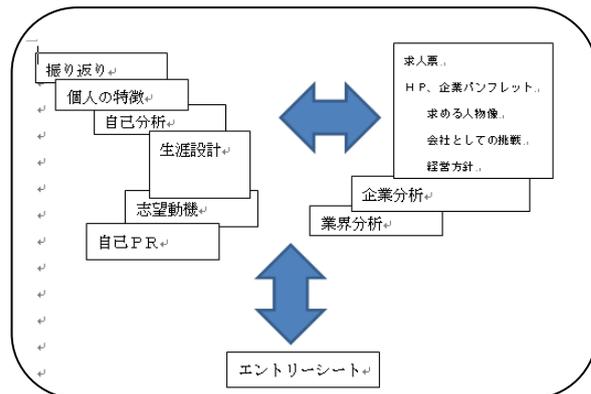


図2 自己分析、業界・企業研究、応募書類（エントリーシート）の作成手順

図3は、システムコンテンツの概念図である。

このシステムでは教員だけでなく、委託したモデレーター（補助支援者、就活終了生、OB・OG）が、支援者の指示で学生作成物を共有してネットによる簡易添削やリアルグループ添削も可能にできる。

教員と学生が時間を気にせず提出物や添削結果を共有できるため、努力するだけ履歴書やエントリーシートの内容を充実させて就活に関する認識を深めることが期待できる。

開発ツールは、国立情報学研究所が開発したオープンソフトウェア Net Commons を用いた。図3は活用イメージといえる。評価するシステムでは教員と学生が文書を共有しているが、将来的には学生相互の文書共有も可能にできる。

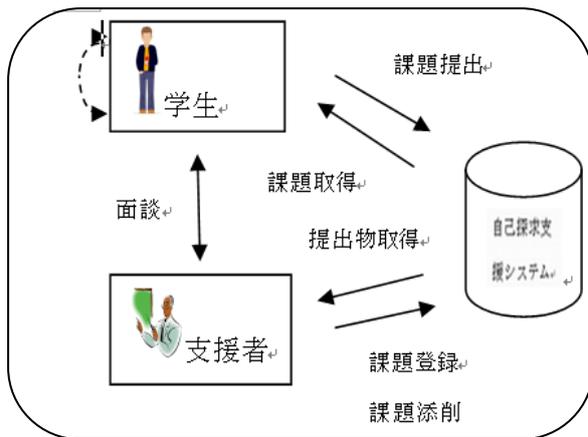


図3 システムのイメージ

図4はシステムの機能図である。今回は就職知識学習機能を利用しなかった。

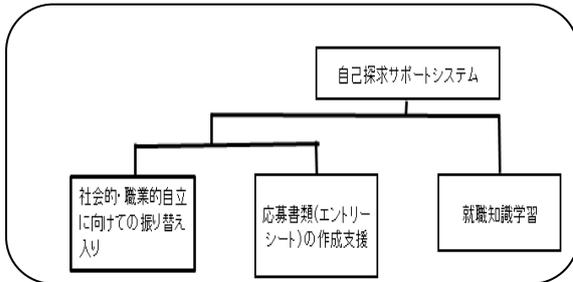


図4 システムの構成

図5は、開発したシステムのスタート画面である。



図5 システムのスタート画面

このシステムを運用するノウハウを蓄積・精査することによって、教員は場所や

時間を問わずに時間的余裕の範囲で就活支援に携わり、学生の満足感を向上させることが期待できる。

3. 実践結果

3.1 自己探求支援システムの実践

筆者らが担当する専門演習(ゼミナール)の3年生16名に対し2015年9月21日から7回にわたって実践した。その内容は自己分析、業界・企業研究、志望動機、自己PRに関する7つの課題である。まず[I]~[III]の学修の振り返りからはじめ、[IV]の業界研究、[V]の企業研究を経験させて志望動機と自己PRにつなげる標準的なシナリオとした。

[I] 中学・高校時代を振り返えろう

[II] 大学に入ってからしたこと、考えたことを振り返えろう。

[III] これまでの生活であなたが身に着けた力と今後の目標を書いてください

[IV] 働きたい業界を選ぼう

[V] その業界で2つ企業を選んで比較しよう

[VI] ある企業を想定して志望動機を書いてみよう。

[VII] ある企業を想定して自己PRを書いてみよう

図6はテーマIIの提出例である。この例は[II]に関する記述であるため、コメント記入の視点は、[①仕事内容]、[②目標]、[③身に着けたこと]、[④周囲からの評価]などであり、教員はできるだけ具体的に書くようにコメントした。

学生が記述した内容を①~④の視点で評価し、①だけしか書いていなければ1点、④まですべて書いておれば4点とした。7課題の合計点を課題評価点とした。

他の課題についても適切に記述できれば、履歴書やエントリーシートに記入する内容(学修、地域活動、クラブ・サークル、

趣味、アルバイトなど) に対処できる。また課題ごとにコメント内容の視点を設定するため実用性と汎用性が高くなる。

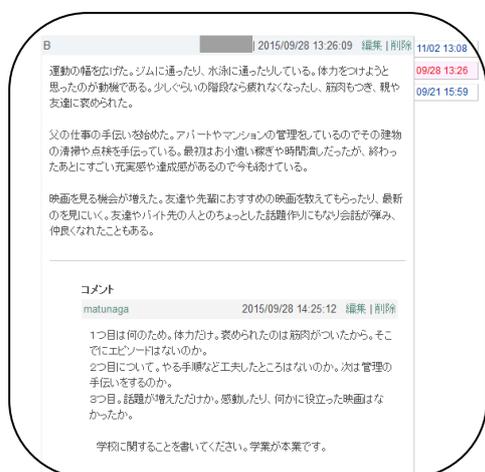


図6 提出例

表1 学生の評価点

	課題評価点	活動状況	開始時期	終了時期	満足度
A	8	1	4	2	1
B	18	1	4	1	1
C	24	2	4	3	2
D	15	1	4	2	1
E	14	2	3	2	2
F	28	1	1	1	1
G	19	1	2	1	1
H	28	1	1	1	1
I	4	2	4	3	2
J	14	1	2	1	1
K	12	3	5	3	2
L	7	3	5	3	2
M	12	3	4	3	2
N	6	2	4	3	1
O	10	1	3	1	1
P	27	1	3	2	1

表1の左欄は課題評価点(28点満点)である。3年生の後期で就活開始時期が近いにも関わらず評価点のバラツキが大きいことが読み取れる。このように現在の大学に対して大学は、学生の気質を十分に承知して詳細に分析し、就活が生涯設計のスタートラインであることを理解させ、結果と努力の関係を実感させる粘り強い支援が不可

欠と考える。

3.2 自己探求支援システムの評価

3.2.1 課題評価点と活動終了時期

2016年7月に学生によるアンケートによりシステムの評価を行った。その1部を表1の右欄4列に示す。各欄の整数値は以下の意味をもつ。

○活動状況

1: 決定、2: 内々定、3: 活動中

○開始時期

1: 2015年10月頃、またはそれ以前、
2: 2016年01月~2月、3: 2016年3月、
4: 2016年4月~6月、5: 2016年7月以

○終了時期

1: 2016年5月、2: 2016年7月、3: 活動

○満足度

1: 満足、2: 不満足

図7は課題評価点と終了時期の散布図である。

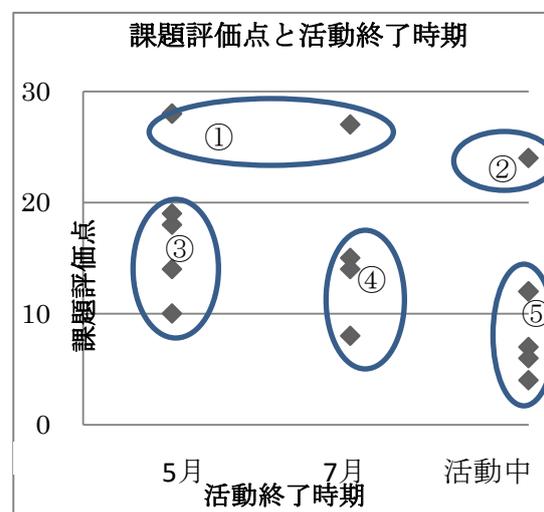


図7 課題評価点と終了時期

課題評価点が高いグループ①と②、それ以外のグループ③と④と⑤に分かれていると見る。(境界値70%)

専門演習における観察では①と②の違いは、学生の就活への取り組み方によるとみ

ている。②の学生は内定を獲得すると、もっといいのがあるかのしれないと改めて探し始めるタイプである。

③の学生は、業界や企業内容を調べて就活に取り掛かり、うまくいかないと速やかに準目標に切り替えるタイプである。④の学生は自信がないのか努力してもなかなか成果の出ないタイプである。⑤の学生は夢のまま具体的な目標を持たず就活に入った、もしくは本気で就活に入った時期がかなり遅かったタイプである。

昨年度までの観察結果は、数値化していないが概ね今年の傾向と変わらない。

3.2.2 アンケート項目間の相関分析

表1のアンケート項目間の相関分析の結果を見ると、1) 活動状況は開始時期と相関が高い、また2) 終了時期は開始時期と相関が高い、3) 活動状況と満足度の相関が高いことがわかる。教員にとっては経験的に感じている内容であり違和感もなく納得できるが、学生の回答データからも同じような結果を得られたことは、その数値にある程度の信頼性があると考えられる。

表2 アンケート項目間の相関分析

	活動状況	開始時期	終了時期	満足度
現状	1			
開始時期	0.65	1		
終了時期	0.83	0.78	1	
満足度	0.87	0.55	0.75	1

3.2.3 就活終了時期の推定

表2で終了時期と開始時期と相関が高いことが示されている。

そこで表3に回帰分析の目的変数を「終了時期」、説明変数を「開始時期」として

分析した結果を示す。終了時期推定欄の数値は、回帰式の計算値を四捨五入した値である。個人ごとの特性を斟酌すると妥当な結果であると考えられる。

表3 就活終了時期の推定

	開始時期	終了時期	終了時期推定	評価
A	4	2	2	予想内
B	4	1	2	健闘
C	4	3	2	予想外
D	4	2	2	予想内
E	3	2	2	予想内
F	1	1	1	予想内
G	2	1	1	予想内
H	1	1	1	予想内
I	4	3	2	予想外
J	2	1	1	予想内
K	5	3	3	予想内
L	5	3	3	予想内
M	4	3	2	予想外
N	4	3	2	予想外
O	3	1	2	健闘
P	3	2	2	予想内

3.2.4 自己探求支援システム

についての意見収集

表4 就活開始時期の推定

	課題評価点	開始時期	開始時期推定
A	8	4	4
B	18	4	3
C	24	4	2
D	15	4	3
E	14	3	3
F	28	1	2
G	19	2	3
H	28	1	2
I	4	4	4
J	14	2	3
K	12	5	4
L	7	5	4
M	12	4	4
N	6	4	4
O	10	3	4
P	27	3	2

さらに「終了時期」に対する「課題評価点」の寄与を分析するため、目的変数を表

1の「終了時期」、説明変数を表1の「課題評価点」と「開始時期」として回帰分析を行ったところ、「課題評価点」の寄与率は少なかった。

そこで寄与率の高いと考えられる表1の「課題評価点」と「開始時期」の関係を分析するため相関係数を求めた(-0.651)。課題評価点が低いほど就活開始時期が遅くなっていたことがうかがえる。

次に回帰分析で「開始時期」を「課題評価点」から推定した結果を表4に示す。開始時期推定欄は回帰式の計算値を四捨五入して整数値とした。就活開始時期が課題評価点で説明できる可能性があることが読み取れる。しかし課題評価点を持つ意味を慎重に吟味すれば、さらに別の適切な指標で置き換えられることも考えられる。今後の課題であろう。

課題評価点を向上させることが学生の就活開始時期を早めることになるという可能性については、さまざまな要因が複雑に絡むため慎重に検討しなければならない。

最後に就活支援に対するシステムの有効性を検証するために、「2016年秋期に担当する3年生にシステムを活用しようと考えています。あなたの意見を教えてください」という内容のアンケートをとったところ、16人全員がシステムを利用したほうが良いと回答した。

その理由を記述した16人の回答文字数は742文字であった。テキストマイニングツール「kh-coder」を使って意見の集約を行ったところ、最小出現回数を3回としてクラスター分析の結果を読み解くと、内容は「自分で履歴書や就職に関して書いた内容を振り返ることができ、エントリーに役立つことを理解できる」と解釈できる。

4. おわりに

学生の進路選択に応えるために、SNS(Social Networking Service)を利用した就活スタートアップ自己探求支援システムの開発しその評価をおこなった。その結果、1) 就職活動状況は開始時期と相関が高い、また2) 終了時期は開始時期と相関が高い、3) 活動状況と満足度の相関が高いことがわかる。また4) 課題評価点が低いほど就活開始時期が遅くなっていたことが知られる。

また利用した学生全員はシステムに好意的な評価を与えていた。

これらの結果より課題評価点を向上させることが就活開始時期を早めるという示唆が考えられるが、それは学生・教員・大学などの要素が絡むと考えられるため慎重に検討しなければならない。

以上のように教師の経験則と大きく外れない結果が得られたが、今後運用を重ねて学生の満足度を上げられ、教員の負担を軽減できる運用方法を開発しなくてはならない。

注1)

* 非ブランド上位は偏差値56~46の私立大学、非ブランド下位は偏差値45以下の私立大学とされている。

参考文献

- [1] 労働政策研究・研修機構, 労働政策研究報告書, No. 78, 2007
- [2] 松永公廣, 江利川良枝, 高木直人, 上田幸則, 鴨谷真知子, 「就活スタートアップのための自己探求支援システムの開発-リアル・ネットブレンディッド方式-」情報コミュニケーション学会第18回研究会, Vol. 12, No. 4, pp15-16, 2015